

【文部科学大臣奨励賞】

「目で見て覚える。慣れで覚える。」 岡部憲和 （東京大学教育学部附属中等教育学校 1年）

僕の家には、『増太郎』と彫られた、ハサミがあります。実際、手に持つと、「うっ」と思うほど、重いです。そして、刃を見ても、かなり太目で、物理的に考えて切れ味が良いハサミとは思えません。ただ、持つ所は、ゆるやかなカーブがかかっていて、持ちやすかったのが、実際に使ってみました。すると、シャワシャワという音がして、不思議なくらい真っすぐに切ることができ、驚きました。僕は、ハサミを使うのが下手で、まともな直線を切れたことがなかったからです。僕は、急に、どうしても、このハサミを作った、増太郎さんに会いたくなりました。

増太郎さんの家は、東京の金町にあり、家と工場がつながった一軒家でした。石に彫った、『増太郎』の表札が、みごとでした。増太郎さんは、小柄な、めがねをかけた、やさしそうな人でした。

早速、ハサミ職人になった経緯から何うとおちついた声で話してくださいました。

「私は、十才の頃、両親を亡くして、その頃から仕事をしていました。どうして働くのかも、何故その場にいるのかも分からなくて、ただやれと言われたことをやっていました。でも、作るのが嫌になったことはないですね。その頃は食べるために、早く、一人前にならなければいけないとも、思っていましたから。」

十才で両親を亡くした生立ちから考えると、つらいことが多かったはずですが、でも、増太郎さんは、かげりの全くない人でした。

次に、跡継ぎの息子さんに、何を求めるか増太郎さんに尋ねると、答えは明快でした。

「最近、伝統的工芸も科学的になってしまっている。火の温度を測るのに、温度計を使ったり、説明書を読んで作ったり、私たちの頃とだいぶ変わってしまったよ。私の頃は、『目で見て覚える。慣れで覚える。』で習ったから。私は、科学的でない伝統的なやり方を次の代に受け継がせたいと思っています。」

実際、跡継ぎの人に、伺ってみました。

「僕は、科学的でない教え方で教わっています。何事も経験が大事で、慣れで覚えろと、よく言われます。僕は、先生に教わった通りのやり方と、自分のやり方というの合わせてやっていきたいと思っています。」

跡継ぎの人に、増太郎さんの気持ちが、十分に伝わっているのが、よくわかりました。

最後に、増太郎さんの奥さんに伺いました。

「主人は、一つのことを極めたから、良いのだと思います。私は、ハサミを売っていて、『今までにない切れ味。』と言われている主人が好きです。普通は、仕事をしていたら、誰だって苦勞を感じるとは思いますが、主人は感じてないと思います。あの人は、本当に作るのが楽しくて作っているんです。」

僕は、奥さんのことばの端々に、増太郎さんに対する尊敬の気持ちを感じました。

増太郎さんは、小さい頃に両親が亡くなってしまい、生活のためにハサミを作り始めました。しかし、一人前と認められてからは、自分がやり続けて来たことを、時代に合わせることなく、そのまま跡継ぎの人に受け継がせようと考えて来ました。『目で見て覚える。慣れで覚える。』という、仕事の覚え方を、後に伝える使命に燃えていました。

また、この職人を、「一つのことを極めた人で、本当にハサミ作りを楽しんでいるんです。」と言える、奥さんが支えていました。さらに、父親を、師と認識して、「先生に教わった通りのやり方で、慣れで覚える。」と言い切る、跡継ぎの息子さんが、いました。

僕は、『目で見て覚える。慣れで覚える。』というやり方を、しっかり守り続けて来たことが、増太郎さんの技術と信用を高めたと信じます。そして、家族の強い信頼関係が、増太郎さんがハサミを極めた職人として、一生を通せる礎になっているのだと思いました。職人を支える人の大切さを実感できました。